# もしアナスタシアが第一部からカルデアに居たら

しょーやの梅酒

## 【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

永久凍土帝国アナスタシアをプレイし終えて、彼女の魅力にやられてしまいました。カドックとの主従関係も非常に良かったのですが、どうせなら汎人類史側のアナスタシアも書いてみたい、もっと悪戯好きで活発な皇女様を見たいと考え筆を執りました。

# 目次

本編
色褪せぬ思い出――――1
おまけ
絆レベル0――人間不信の皇女様
24
絆レベル1――やや人間不信の皇女様
――――32
絆レベル2～3――壁越し会話な皇女様
――――40

# 本編

# 色褪せぬ思い出

燃やされた人理を取り戻すための最後の砦である、人理継続保障機関フィニス・カルデア。

数多の特異点を巡り、特異点を修復していく彼らに安寧は少ない。司令部はいつも灯りが点いて人がいるし、最後のマスターたる少女はその足で特異点という死地を踏破する役目を背負わされた。ほんの少人数で世界を救うために、誰もが必死になって人理焼却という理不尽な所業に立ち向かっているのだ。

――カリカリと、紙に鉛筆を走らせる音が室内に響いた。

白く清潔な印象を与える簡素なマイルーム、それが唯一のマスターである藤丸立香という少女に宛がわれた部屋だった。物も少なく生活感が乏しいが、それでも彼女にとってはプライベートな空間に他ならない。

そんな自室でわざわざ机に向かって書いているのは、有り体に言えば日記である。別に、彼女の趣味が日記を付けることという訳ではない。むしろそういうのは三日坊主で終わるのが常だった。なのにどうして書き始めたのかと言えば、やはりいつ死ぬか分か

らない状況に置かれてしまったからなのだろう。

――紙と鉛筆の音が擦れる音が少し止まり、立香は少々内容に悩む素振りを見せてから、また緩やかに鉛筆を走らせる。

現在カルデアは第三特異点までの修復を完了し、概ね順調に人理修復を目指して進んでいる。頼りになるサーヴァントやロマンを筆頭としたカルデアの職員たち、それに隣でいつも支えてくれるマシュが居たからこそ成し遂げられた成果だ。

それでも、これから訪れる特異点であっさり立香が死んでしまう可能性もゼロではない。どころかむしろ死の危険性は大いに付きまとう事だろう。現代日本ではただの女子高生をやっていた彼女に命のやり取りは重すぎるし、もしそうなった時のために『自分が生きていた証』を目に見える形で残しておきたかったのだ。

――今度こそ鉛筆の音は鳴りやみ、立香は苦笑を浮かべながら日記帳をパタンと閉じた。

内容を誰かに見せるつもりは無い。中には最後のマスターらしからぬ弱音や本音が山ほど綴られ、飾り気のない素直な感情が吐き出されているのだから。こんなものをマシュやロマンが見てしまえば、きっと彼女らは気に病んでしまうだろう。それは本意ではなかった。

日記が誰にも読まれないよう机の引き出しに厳重に仕舞いながら、ふと立香の頭を疑

問がよぎる。せっかく日記を残しているというのに、いざ死んだとき誰も見つけてくれなければ書いた意味がないのではなかろうか？　それでは意味がない。かといって無防備にした挙句いつの間にか読まれていても面倒だし女々しいし――

「マスター、緊急事態よ。すぐに出てきてちょうだい」

自分のうっかり具合に悶々としていたら、扉の向こうから透き通るような少女の声が聞こえてきた。すぐに日記のことは頭の片隅に追いやり、慌てた表情を浮かべて扉を開ける。このカルデアではどんな事態が起きても不思議ではないのだ。

扉の先の廊下で待っていたのは長い銀髪に青い瞳を持った白皙の美少女だ。豪奢な白いドレスを着こなす様は〝高貴〟という言葉がこれ以上なく似合っていて、同時にどこか氷のような冷たい印象をも抱かせる。

彼女こそは燃え盛る冬木の地で最初に召喚したキャスターのサーヴァント、その真名をアナスタシア・ニコラエヴナ・ロマノヴァという。氷のような佇まいを持ち、氷と精霊を自在に操る魔術師だが、彼女は歴とした皇帝（ツァーリ）の血筋を引く皇女様でもある。

そして同時に、意外とお転婆娘な気質も持ったサーヴァントだった。

どうしたの――と勢い込んで立香が訊ねる前に、パシャリとシャッターを切る音が。フラッシュは焚かれていない。何事かと驚きながら音のした方へと首を向ければ、ちょうど扉の真横、立香の死角にもう一人のサーヴァントが立っていた。手慣れた手つきで

カメラを構えている彼は、写真撮影にハマった守護聖人と名高いゲオルギウスである。
「ふふっ、今のあなたとっても面白い顔をしてたわ。どうでしょう聖ゲオルギー、ばっちり撮れたかしら?」
「それは勿論ですとも。ほら、このように」
「まあ、マスターの驚いた顔がくっきり映ってる！　現代のカメラというのはこんなにも綺麗に撮れるものなのね！　私(わたくし)の時代にもあったならきっと毎日が楽しかったでしょうに」
「そうでしょうそうでしょう、私の時代からすればもっと考えられない技術です。手軽に旅の思い出や、日常の何気ない一場面を切り取って保存できるのですから。いやはや、この時代に呼ばれてカメラと出会えたのは僥倖でしたよ」
　呆然とする立香を横目に、いかに現代のカメラが素晴らしいか、不意打ちの顔を取られた立香の顔が面白いかでアナスタシアとゲオルギウスが盛り上がっている。彼女にはとてもついていけそうにない談義である。
　ともあれ状況がよく分からないので、立香はコホンと軽く咳払い。カメラの画面を眺めて会話に花を咲かせていた両者もすぐに立香へと意識を戻した。ゲオルギウスはすまなさそうな、アナスタシアはしてやったりな表情が印象的だ。
「申し訳ない、マスターに無礼を働くつもりは無かったのですが、そちらの方の口車に

乗ってしまいまして……マスターの面白い顔を撮ってみたいというものですから、つい」

「あら、かの守護聖人様が他人に責任転嫁してしまうなんて。これは意外な一面を見つけてしまいました」

「ああいえ、そういうつもりは無くてですね……」

「冗談です、あまりお気になさらないでください。あなたも、緊急事態なんてこれっぽっちも無いので大丈夫ですよ」

クスクスと笑うアナスタシアにゲオルギウスは困り顔だ。彼女が小さな悪魔（シュヴィブジック）の綽名（あだな）に恥じない悪戯好きというのは既によく知っている。だから立香も全く怒ってはいなかったし、むしろまたやられてしまったと苦笑するばかりである。

彼女、アナスタシアとは気安い仲だ。しばらく前はお茶会に誘われたかと思えば凍り付いた紅茶を出されたこともあったし、いつだったかは木登り勝負を挑まれたことすらある。皇女らしからぬ行動力と悪戯心の化身なアナスタシアの言動は、同じ年頃の立香としても親しみを持ちやすい間柄となっていた。

だから今回の行動もそんな戯れの一環なのだろう。召喚直後の頃の人間不信な様子は既になく、立香という同年代の少女相手（マスター）に思う存分やりたいことをやる素顔が垣間見えていた。

それにしても、ただ悪戯の為だけに呼び出されたのだろうか？　別に構わないが少しばかり腑に落ちない。そんな立香の様子が伝わったのか、アナスタシアが微笑を浮かべて手の中の物を差し出した。ゲオルギウスの持つカメラとはまた違うタイプのカメラがそこにはある。

「聖ゲオルギーから聞いたのですが、何でも現代には〝自撮り〟や〝料理を食べる前に写真を撮る〟文化があるらしいとか。そこで私もやってみたいと思い立って、あなたの所を訪ねたのです」

「私もそれなりに写真を撮ってはいますが、やはり現代を生きるマスターの方がこういった最新の文化には詳しい所があると思いまして。よければ一つ、私も一緒にご教授願えないかと」

そういえば、とふと思い出す。アナスタシアの生前の逸話には鏡に自身を映して写真を撮るという、いわば自撮りに近い行いもやっていたらしい。しかも変顔で。こんな銀髪青目の美少女が変顔自撮りなんて想像もつかないが、とにかくカメラを愛用していたのは確かだという。

加えてゲオルギウスといえばモスクワの守護聖人なんだとか。だからアナスタシアは彼のことを聖ゲオルギーと呼んでいるのだろう。立香は宗教に明るくないが、有名な偉人が同じ趣味を持っているならそれはもう話したくなる気持ちは分かる。

まあどうにせよ、立香もカルデアに来る前は花の女子高生だったのだ。自撮りやインスタグラムへ写真をアップするくらいやったことはあるし、サーヴァント達に比べれば詳しいのも間違いない。彼女たちの提案に不満は無かった。

「それじゃあ決まりね。早速行きましょう」

「今回は特異点に赴くつもりはないのでご安心を。あくまでもこのカルデア内に限定して、色んな風景を写真に収めようという魂胆ですので。ひとまず歩きながら、彼女にカメラの使い方を教えてあげてくださればと」

無表情でグイグイと背中を押してくる皇女様に根負けして、ひとまず立香は彼女たちの思惑に付き合うことにした。写真を撮るだけなら悪い事にはならないだろうし、何よりも——形として残る想い出に立香も興味があったのである。

◇

カルデアの召喚は良く言えば多様性があり、悪く言えばガバガバである。ある程度の縁が有れば英霊も反英雄も等しく召喚できるし、かと思えば全く縁のない相手が唐突に召喚されることもままある。

例えばゲオルギウスは前者であり、第一特異点で出会った縁を元手にカルデアに召喚された。そのしばらく後にカメラについて聞かれ、立香がカルデアの倉庫から使われていないカメラを探し出してきたのは記憶に新しい。聖人が撮影した写真なんて、それだ

けで聖遺物なのではとたまに考えたりする。
逆にアナスタシアは後者だ。これまでの立香の人生はロシアと何ら関わりが無かったはずだが、マシュを除いて最初に契約したサーヴァントが彼女である。これはもう完全に偶然の産物であり、おそらくは本家の英霊召喚システムに則り召喚者と相性の良いサーヴァントが召喚されたのだろうと結論付けられていた。
つまり、藤丸立香とキャスター・アナスタシアは相性が良いとされている訳だ。そして実際、あんまり間違っていないとも思う。
「へぇ、現代では自撮り棒なんて便利なものが発明されているのね。わざわざ鏡に映さなくても自分の顔が撮れるなんて、とても便利そう。今度見せてちょうだいな。……え、今は持ってない？　……それは残念だわ」
カルデアの廊下を歩きながらカメラの扱い方を一通りレクチャーしていく。取り敢えずはシャッターの切り方とフラッシュの設定、撮影した写真のデータ閲覧のやり方を簡単に教えたところだ。その時点でアナスタシアはいても立ってもいられないらしく、瞳が好奇心でキラキラ輝いているのがよく分かった。
試しに何枚か撮影してみる？　と聞いてみれば彼女は迷わず首を縦に振った。まずは彼女の指示に従ってゲオルギウスの隣に立たされ、そこで一枚。そのすぐ後にカメラの向きを変え、微笑んだ自身の顔を枠に収めた自撮りで一枚。合計二枚の撮影を終え、

アナスタシアは早速カメラを閲覧モードに切り替えていた。
「本当にすごいのね……こんな小さなカメラで、こんなにもくっきり撮れるなんて。色も鮮やかだし、まるで写ってる人たちが写真の中で生きているみたいです」
「時間を掛けて描いた絵画も美しいですが、こうしてありのままを素直かつ手軽に残せる写真もまた素晴らしいものです。文明の産んだ利器とはまさにこのことでしょう」
「私(わたくし)もそう思います。ほんの百年程度の年月でこうも世の中は変わるものなのですね……」
「それだけ人の営みとは強固だという事でしょう。楽を求めて良いも悪いも様々な進歩を遂げるのが人間ですが、だからこそこうした優しい機器が発明される事実が際立つのですよ」
　何やらしんみりとした空気になってしまった――内心で立香は慌ててしまう。片や悲劇の皇女、片や名高い聖人だけあって言葉の重みが立香とは段違いである。どうしてカメラ一つ語るだけでこうも深みが出るのか、立香にはてんで真似できない範疇であった。
「これでカメラの使い方は覚えました。さあ、次は本番ですね。今日の私(わたくし)はこのカメラで写真を撮り切るまで止まらないと知りなさい」
　氷のような無表情ながら興奮した様子のアナスタシアに、『まるで新しい玩具を手に

入れた子供みたいだなぁ』と感じてしまう立香である。現代のカメラをお気に召してくれたようで何よりだ。

などと生暖かい視線を送っていたら、ムッとしたように彼女は頬を膨らませた。考えていたことは筒抜けだったらしい。

「む……子供っぽいと思われるのは心外です。あなたはありがたみを理解出来ていないのかもしれませんが、これだけの機械を好きに使って良いと言われてしまえば誰だって私(わたくし)のようになるでしょう。ええ、間違いなくなるはずです」

「それにしては随分と目が輝いているようにも見えますがね。なに、恥じる事など一つもありませんとも。時には童心に帰って楽しむのも人の有り様なのですから」

「あなたまでそのような事を――もしや、先ほどの仕返しだったりしますか？」

「おや、バレてしまいましたか」

全く悪びれない様子のゲオルギウスは、カメラを持った手で廊下の先にある扉を示した。そこは食堂の入口であり、昼食時なのか良い匂いが漂ってきている。

「まずはあそこで食べ物の写真でも撮ってみましょうか。マスターがどういう意図で写真を撮るのか、私も興味がありますからね」

◇

スパイス香る黄色いルーに、白く輝く白米たち。料理上手なサーヴァントたちが作っ

てくれるカレーというのは簡易料理という概念を越え、もはや一流の味と見た目が保証されたものである。

日本が誇る改造海外食ことカレーは、現代日本人の少ないカルデアでも人気を誇る一品だ。中でも現代に詳しい赤い弓兵ことエミヤと、水辺の凄女こと聖女マルタは料理が上手であり、暇さえあれば立香や職員たちに料理を振舞ってくれる。カルデアという娯楽の少ない施設において、彼らの作る美味しい料理というのは貴重な活力の源だった。

「このカレーという料理、私(わたくし)も好きよ。ちょっと匂いが強いのと服に付いたら大変なのが微妙だけど、味は美味しいし身体が暖かくなるもの。かつてのロシアにも有ったらと思わずにはいられないくらい」

「食べやすいというのも魅力の一つなのでしょうな。スプーン一つで簡単に、そしてたくさん食べれてしまう。栄養もしっかり摂れるとなれば、人気になるのも頷ける話です」

カレーの良い香りに引き寄せられるように食堂へと向かった三人は、いつものようにシェフを務めていたエミヤから皿を貰うと大人しく席に着いていた。立香とアナスタシアが並んで座り、対面にゲオルギウスが座す形である。

既に皇女様はやる気も露わにカメラを構えているが、まずはお手本を見せるべく立香は懐からスマホを取り出した。電波の通じない現状では九割方の機能が使えない産廃

と化しているが、カメラ機能はまだ生きている。インスタ映えするようにカレーの位置を調整してから、これまたパシャリ。カメラロールに保存された写真を二人が見やすいようにテーブルに置いた。

「なるほど、料理写真はこのように撮るものなのですね。自分が写り込んだりはしないの？」

「こういう写真は自分よりも料理を主役に置くということなのですかね。余計なものを入れずに料理だけを撮ることで、写真を見る人が料理の綺麗さに感嘆しつつ味を想像しやすくする。理に適っていると言えましょう」

「そうね、でもどうせなら……」

　言った傍からペタリとアナスタシアが机に突っ伏した。驚く立香とゲオルギウスの前で彼女はカレーの皿の隣に顔を並べると、腕を伸ばしてカメラを高く上げた。それから当然のようにシャッターを切り、立香達へと見せてくる。

「やっぱり美味しそうな料理なら、自分も一緒に写ってみたいです。そちらの方がより『自分はこれからこの料理をいただきます』と伝わりそうですから」

　なるほど一理ある、と頷いてしまった立香である。ただ顔を入れない理由は単純にネット上のプライバシーに由来するところなのだが……過去の人にその辺りを理解しろというのも難しいだろう。

しかもこの写真、明らかにアナスタシアの方が目立っている。カレーもでっかく写ってはいるのだが、いかんせん横に並ぶ銀髪美少女のインパクトが強すぎるのだ。もしこの写真をＳＮＳにアップしようものなら『カレーとかどうでもいいけどこの美少女誰だよｗｗｗ』と言わるのが目に見える。まあジャンクな料理と美少女な構図はギャップ萌え的に悪くないのかもしれないが。

「これで撮った写真は確か、インスタグラム？　なるものに投稿するのでしたか。色んな方と目の前の料理の絵を共有できるのは興味深いです」

「ここが良かった、これは駄目だったなどと感想を書いて、見知らぬ他人と意見を語り合う。広い世界の利点を最大限に活かした楽しみ方なのでしょう。世界を取り戻した暁には、何気ない日常の写真で是非とも挑戦してみたいものです」

「私（わたくし）も変顔写真でも投稿してみようかしら。他の人のもたくさん見れたら、きっと毎日を笑って過ごせるわ」

――クールにさらりと言ったけど皇女様、ホントに変顔自撮りなんてしてたんですね。そう言いたいのをグッと堪えつつ立香はカレーを口に運んだ。やはり美味い。この味があるからカルデアで生きていけるようなものである。

それにしても、こうして食べる前に写真を撮っていると少し前の平和な女子高生に戻ったかのようである。友人たちと適当にワイワイ騒ぎながら、お気に入りの喫茶店で

頼んだメニューを写真に収める。随分と懐かしくて、遠い記憶になってしまったものだ。

　こうなるとさしずめアナスタシアは同年代の友人で、ゲオルギウスは写真仲間のおじ様だろうか。何気ない日常を過ごしていた頃を思い出してしまい、今度は立香がしんみりとしてしまう。

「ほらマスター、そんな顔をしていたらせっかくのお料理も美味しくいただけないわよ。きっと色々な重荷を感じているのでしょうけど、思いつめたら沈んでしまうだけなのです。だからせめて、虚勢でも笑ってなさい。意地を張ることも出来なくなったら時こそ、本当の終わりなのだから」

　自分はそんなに暗い顔をしていたのだろうか。自覚などこれっぽっちもなかったが、アナスタシアもゲオルギウスも心配そうに立香の顔を覗き込んでいた。こういう弱音はあまり見せないように振舞っていたのだが、少々ボロが出てしまったらしい。それとも若くして逃れられぬ渦に巻き込まれたという、今の立香と似た経験をしたアナスタシアだからこその言葉なのか。

　なんとも気まずい形で空気が固まってしまい、場を誤魔化すように更にカレーを食べる。どんな時に食べてもエミヤ印のカレーは美味いのだが、先ほどよりは味が分からなくなっていた。

ちょうどその時、勢いよく食堂の扉が開いた。軽快な足音と共に「先輩、こちらに居たのですか？」と嬉しそうな声が飛んでくる。見なくても分かる、立香の大事な後輩であるマシュだ。

やって来たのは彼女だけでない。その後ろからは食堂で見るのは珍しい気がするうだつの上がらなそうな青年、ドクター・ロマンの姿がある。さらに彼と共にやって来たのは――

「おやおや、皆さんお揃いのようで～。もしかしてお金の話とか、したりしてますかぁ？だったら是非私も一枚噛ませて欲しいなって」

褐色の肌にスベスベモフモフなケモ耳と尻尾を携えた女性である。交易や金勘定に目が無いそのサーヴァント――シバの女王は、ロマンの呆れ顔も何のそのな調子で立香達に絡んできた。

もちろん女王が好むような話なんてこれっぽっちもしていないが。そうやんわりと告げると彼女は残念そうにしつつ、ごく自然な所作でゲオルギウスの隣に腰を下ろした。食事の不要なサーヴァントらしく食べるつもりはないらしい。むしろこうして共に食べている皇女と聖人が例外だったりするのだが。

「こんにちは、シバの女王陛下。申し訳ないですが、今の私たちは写真について語っていたところでして。残念ながらお金になるような話ではないかと」

「それは残念ですねぇ。あ、でも写真なら写真でサーヴァントの写真集を売り出すとかどうでしょう？　皆さま美男美女が揃っている訳ですし、色んな写真を撮って売り出せば結構な儲けになりそうな予感がしますね～」

「へぇ、面白そうね。もし本当にやるというのなら、是非カメラは私に任せて欲しいわ」

「有益なパトロンゲット～！　皇女のお墨付きとなればより高値で――」

未来の儲けにムフフと目を輝かせている女王の隣に、カレーを持ってきたロマンがやはり呆れ顔のまま腰を下ろした。立香の隣にはマシュが陣取り、やはりカレーを前にワクワクした様子である。

「いやいや、何か話がとんとん拍子に進んでるけどまず売る相手がいないからね!?　あと魔術関係を無暗に外にばら撒いたらエライことになるからホントやめてくださいお願いします！」

「分かってますよ～それくらい。だからこうして人理修復にも手を貸してる訳ですしい。無事にお金を稼げる世界になったら、上手いこと色んなルートを用いてガッポリ稼いじゃいますので！」

「あ、相変わらずですねこの人は……」

マシュの言葉に全力で頷いた。召喚した当初から今日まで、彼女のスタンスは一ミリたりともズレていないのだから商魂逞しいと言うべきか。

シバの女王を召喚したのはしばらく前のゲオルギウス召喚と同じころ、第一特異点オルレアンを無事に乗り越えた後である。彼女もアナスタシアと同じく立香とは何ら関係が無いはずだったのだが、どういう訳か召喚に応じてくれたのだ。ふらりと召喚を見に来ていたロマンのビックリした顔が今でも印象深い。

「ん、どうしたんだい立香ちゃん？　ああ、ボクが食堂に居るのが珍しいって？　確かにそうだね、今日はちょっとシバの女王に近未来観測レンズ・シバの調整を手伝って貰ってたんだけど……終わり際にマシュとばったり出会ってね。一緒に食堂でご飯を食べようって誘われちゃったら、断るのも忍びないだろう？」

「普段の調子はともかく、ドクターも司令官代理として頑張っていると思いますから。あまり根を詰めすぎないでいただければと思いまして。仕事の邪魔になっていたら申し訳ないですが」

「邪魔だなんてとんでもない！　むしろこうして労わってくれるだけでもありがたいよ……」

とほほと言わんばかりの落ち込みようだが、実際ロマンに対するサーヴァント達からの評価は割と散々だったりする。チキンだとか全部コイツが悪いだとか、好き勝手言われ放題だ。実はマシュからも辛辣な評価をいただいているのだから相当である。

「それにしても珍しいメンバーが揃ってますね。しかもカメラまでお持ちになって

……」

「あ、ボク分かったかも。それっていわゆる自撮りとかインスタ映えとか、そういう写真撮ってるのかな？」

「あら、知っているのね。てっきりこういうのには疎い根暗系なのかとばかり。ヴィイもそう言っているわよ」

「酷い言い草だね全く！　これでもボクだって立香ちゃんと同じ現代っ子だから！」

「でも確かに、あなたがそういう写真を撮っている姿は想像し辛いですねぇ。そういう娯楽よりも、一人でわき目も振らず黙々と目的に突き進んでる方が性に合ってそうと言いますかぁ」

「い、一応褒め言葉として受け取っときますよ……」

　別に彼自身が悪い訳ではないのだが、どうしてかこういう展開に行きつくから不思議である。立香としてもこういう流れに慣れてしまった節があるのは否定できない。こう、ドクターは弄られ役で固定されてしまったというか。見てるだけでさっきのしんみりとした感傷も綺麗さっぱり消え、楽しい感情ばかりになってしまう。

　立香はこの緩い空気が何より好きだった。

「まあロマニさんのことはひとまず置いておくとしまして。折角ですし、この賑やかな光景を絵に一枚写真を撮らせていただいてもよろしいですかな？」

「あっ、私も撮ってみたいです。今日は目一杯このカメラに写真を収めると決めましたので」
「良いですねえそういうの。思い出は買うことが出来ませんし、失えば買い戻すことも叶いません。写真という形で綺麗に残せるというのなら、あるいはお金よりも貴重な品になるのやも」
「先輩、シバの女王が至極マトモで含蓄のあるお言葉をしゃべっています……！　明日はカルデアに雨でも降るのでしょうか!?」
「失敬な、私はそこの彼と違ってオチ担当じゃありませんので！」
　――あ、ドクターが胸抑えて倒れた。心にグサリと来たようだ。
　それはともかくゲオルギウスが立ち上がりカメラを構えたが、その前にアナスタシアが椅子から立ち上がってちょっと距離を取った。背中を立香達に向け、腕を伸ばしてカメラを自分へと向ける。かつて立香も友人と散々やった、自撮りしつつ皆で写真に入るやり方だ。
　本当に懐かしい。だけど今回はしんみりせず、むしろ右手をピースにしながら積極的にカメラの枠へと突撃した。
　困惑するマシュの肩に左手を乗せて、しっかりとカメラ目線。顔はとびっきりの笑顔だ。

「では皆さん、シャッターを切りますよ」
「あ、ちょ、ちょっと待ってボクの準備が――」
パシャリ。騒々しくも賑やかなカルデアの一日が、カメラの中に収まった。
◇
結局その後は一日中アナスタシアに連れられてカルデア内を巡り、色んなところで色んな写真を撮り続けた。
真面目に仕事をするムニエル氏の背後からこっそり写真を撮って驚かせたり――
前衛的な芸術を作り上げてご満悦のネロ皇帝に逆に記念写真をせがまれたり――
山ほどの飯を相手に挑みかかるセイバー・オルタの雄姿を撮影したり――
とにかくいっぱい撮り続けた。中には二人して変顔してみた自撮り写真なんてのもあって、撮り終えた後にお互い大笑いしてしまった程だ。今日だけでどれくらいの写真を撮影しただろうか。きっと百枚は下らないのではと思う。
だけど楽しい時間というのはあっという間であり、気が付けばもう夜にまでなっていた。いつレイシフトして特異点に挑むか分からない以上、体調は万全にしておかなければならない。夜更かしは厳禁だった。
「今日は一日ありがとう、マスター。とても有意義で楽しい時間でした」
立香の部屋の前で、アナスタシアは折り目正しく礼をした。皇女らしい堂に入った振

る舞い、立香の方が逆に照れ臭くなってしまった程だ。

「でも、それだけの事をあなたにしてもらったのです。感謝の言葉一つでは言い表せないくらい、私(わたくし)は感激してますから」

だから、と彼女は続けた。

「またこうして写真をいっぱい撮って、アルバムを作りたいの。あなたの人理修復の旅は決して、辛いだけでは無かったのだと。同じくらい心躍る冒険があって、心温まるやり取りがあったのだと記録しましょう。あの女王の言う通り、全てがお金には変えられない大切な思い出ですから」

それはなんて――なんて素敵な提案なのだろうか。一も二もなく頷いて、立香はただ「ありがとう」と言った。それしか言葉が見つからなかったのだ。

最後にアナスタシアは懐から一枚の写真を取り出すと、立香にそっと渡してきた。そのまま背を向けて「ではおやすみなさい」と言われ、彼女もまたマイルームへと戻る。

部屋のスイッチを入れ、パッと灯りが点いた。机に向かって座り先ほど貰った写真を眺めようとして……先に日記を思い出した。引き出しの奥底から引っ張り出し、机の上に乗せる。半日近く前となんら変わらない装いであるけども、何故だか今は日記自体に興味が持てなかった。

これはいつもの三日坊主なのかな――そんな風に苦笑して、立香は日記を改めて仕

舞った。たぶんもう、この日記に何かを書くことはないだろう。
今の立香は既に、百の言葉よりも雄弁な『自分が生きていた証』を手に入れたのだから。

◇

パラパラと、ぶ厚いアルバムのページをめくる。
一枚一枚が大切な思い出ばかりだ。カルデアでの楽しかったこと、特異点で見た雄大な景色、時には馬鹿をやってみた時の黒歴史まで、多くの記録が詰まった大切な一冊だ。
その中でふと、立香はアルバムをめくる手を止めた。そこに収められた一枚の写真を目にして、言葉にならない色んな思いがこみ上げる。
写真の内容はとてもシンプルで、しかも賑やかなものだ。でっかく写ったアナスタシアの顔の後ろに、思い切り笑った立香と戸惑いがちのマシュが居る。その隣にはゲオルギウスがカメラを構えた姿で写り込んでいて、ロマンに至っては慌てた様子をシバの女王に揶揄われているような有様である。
言うなれば集合写真なのだろうか。この後もたくさんの人と山ほどの写真を撮ったけど、あの日の夜に彼女がくれたこの写真は一際特別なものだった。そしてもう、この写真の人たちは自分とマシュを除いて誰も居ない。
――サーヴァント達は座に還り、一人は永久に失われた。このような写真を撮る機会

なぞ二度と訪れないことだろう。

それでも、事実を嘆いて現実から目を逸らしたりはしない。立香は現代を生きる人間であるのだから、彼らとの思い出を糧に前を向いて歩かなければならないのだ。そうでなければ立香に様々な物を残してくれたサーヴァント達に失礼だと思うから。

「立香ちゃん、そろそろ査問会が呼び出してくる頃だ。準備をしておいた方が良いぜ」

ダ・ヴィンチちゃんの言葉に立香はアルバムから目を上げた。パタンと小気味よい音を立ててアルバムが閉じられ、丁重に枕の下に隠される。

カルデアの査問会が始まってから今日で五日――魔術師たちの追及は厳しいけれど、立香の胸の中に宿る思い出たちは、何一つ色褪せてはいなかった。

# おまけ
# 絆レベル０――人間不信の皇女様

「近づかないでください」

凍てつかんばかりの声音で釘を刺すかのようにハッキリと言われてしまい、彼女と握手しようとしていた藤丸立香はつんのめる様に足を止めた。顔にははっきりと『マジですか？』と書かれているが、銀髪の少女は全く訂正も謝罪もしようとしない。どうやら冗談でも口が滑ったわけでもなく、本気で近づかないでもらいたいと考えているらしい。

藤丸立香、十七歳。自称平凡な女子高生だがコミュ力にだけは自信がある。どんな相手とでも打ち解けられるのが密かな自慢であり、カルデアというよく分からない職場でも頑張れる自信があったのだが。さすがにこうまで拒絶されてはコミュ力というやつも形無しだった。

チラッと銀髪の少女を垣間見る。肌のほとんどを隠す豪奢な衣装に、雪の妖精のごとき美貌。年の頃は立香と同じくらいだろうか。とても英霊とは思えぬ可憐な容姿だが、ガードの固さを物語るように人形？　らしき物を胸の前でしっかりと抱きすくめてい

た。

とんでもない強敵を前に冷や汗が浮かんでは流れていく。けれど下手な接触は逆効果だというのを感覚で理解し、取り敢えずは口出しせずに頭を下げるだけに留めておいた。

これが立香と銀髪の少女――皇女アナスタシアの最初のやり取りである。

◇

熱い。あらゆる全てを差し置いてひたすらに熱い。

渦巻く大火と怨嗟と呪いに塗れた日本の地方都市に足を踏み入れた立香は、端的に言って極限状態におかれていた。

ここは彼女の出身国である日本の一地方都市とされる冬木市、のはずなのだが、生憎と燃え盛る炎に囲まれ土地も人も荒廃の限りを尽くしている。生存者は一人として見当たらず、我が物顔で闊歩するのは骸骨兵にシャドウサーヴァントたち。この世の地獄もかくやと言わんばかりの惨状だ。

「先輩、大丈夫ですか？」

立香を気遣ってくれる頼もしい後輩の言葉に、彼女は大丈夫だよとだけ返した。心情的にはいっぱいいっぱいではあるが、こんなところで弱音を吐く訳にもいかない。

カルデアにおける四十八人目のマスターとして呼ばれたは良いものの、魔術もサー

ヴァントもレイシフトも何一つ分からないのだ。そんな中でなし崩し的にカルデア爆破という大事に巻き込まれてしまい、この地獄に突き落とされたのだから、主犯には一言もの申してやらなければ気が済まない。

――まあその為にはまず、生きてカルデアに戻らなければならないのだが。

「所長、召喚サークルの設置完了しました」

「よろしい。これで戦力となるサーヴァントを召喚できることでしょう。そこの素人マスターに応えてくれるかは分かりませんがね」

「へぇ、こいつがカルデアの召喚陣なのかい。随分とまあ聖杯戦争とは違うもんだねぇ」

マシュの真面目な報告、オルガマリーの割と辛辣な評価、そしてこの冬木で仮契約を結んだキャスターのサーヴァントの呑気な感想で立香は己が役割を思い出した。

現状は地獄の釜の底、こうなった原因を突き止め排除しなければならないのだ。その為の解決手段として英霊たるサーヴァントを呼び出し、力を以って解決に導く。実に分かりやすい構図だろう。

「召喚の口上は覚えてる？　……知らない!?　呆れた、そんなんだから素人なのよ！　いいわ、特別に教えてあげるから一度で暗記なさい！」

「おーおー、どんどんヒートアップしてんじゃねぇか。ま、怒んのは良いがもうちょい場所を考えてくれや」

襟首を掴まれながら強制的に召喚の呪文を覚えさせられる立香をよそに、キャスターは既に燃え盛る炎の先を見ていた。揺れる炎、陽炎の奥は見通しが悪く――けれど、カラカラと骨の擦れる音はよく響く。オルガマリーの大声に惹かれたのか、骸骨兵達がワラワラと現れたのである。

「そら、敵さんのお出ましだ。こんくらいなら守ってやれるが、戦力は大いに越したことはねぇ。さっさと終わらせてくれるとありがたいぜ」

「先輩、お願いします！」

キャスターとマシュに促され立香は前に出た。シールダーとしての盾を用いた召喚サークル、誰が呼ばれるかははっきり言って運次第である。とにかく自らの助けになってくれる英霊が望ましい。

頭に叩きこまれた召喚の呪文を唱えながら、頭の片隅ではどんなサーヴァントが良いのか考えてしまう。まず漠然とだが、過去の英雄など言われても実感が湧かないしやり辛そうだ。そう考えると同年代くらいの相手か、せめて女性が望ましい。後は何だろう、この熱気と恐怖ばかりが支配する土地において、清涼な空気を運んでくれれば言う事なしであり――

サークルを包む光の中から、この場には全く場違いな冷たい風が吹きつけた。

疑問に感じる暇もない。とにかく呪文の詠唱だけを慌てて終えてしまい、後は成すが

ままに任せた。その間にも吹き付ける冷風はますます激しさを増し、思わず両腕で身体を庇ってしまう程の吹雪にまでなっていた。マシュもオルガマリーも唐突なブリザードに目を見開いて召喚サークルを凝視している。

「随分と暖かい……どころか、暑すぎる土地ですねここは」

少女のものと思しき声だが、淡泊を通り越してまるで氷のようだ。いよいよ暴風と化し始めた吹雪に感情全てを吸い取られてしまったかのよう。一つとして温かみを感じない。

それと同時に光が収まり、地面がピキピキと凍り出した。召喚サークルに現れたのは銀髪青目の少女であり、とてもじゃないが偉大な英霊とは思えぬ姿である。だが、人間とは隔絶した力強さは、素人マスターである立香でも肌で感じ取れたのだ。

「キャスターのサーヴァント、アナスタシア。召喚の求めに応じ参上したわ。状況がよく分からないけれど……まずはアレを倒せばいいのかしら？」

アレと言いながら少女、アナスタシアが指さしたのはキャスターが戦っている骸骨兵達だ。既に多くが地に伏せており割と余裕はありそうだが、彼一人で戦わせるのも忍びないので頷いておく。

――その瞬間、指向性を持った強烈な吹雪が骸骨兵達を一掃した。

凍てつく風に呑まれた骸骨兵達は成す術もなく凍り付いていく。どころか炎に覆わ

れた地面すらも驚異的な速度で氷が張り、霜が降り、辺り一帯の気温が急激に下がっていた。冬という概念が擬人化したかのような途轍もない冷気である。

一言、すごい。サーヴァントとはこれだけのことがいとも簡単に出来てしまうのかと驚かされるばかりだ。開いた口が塞がらないとはこのことを言うのだろう。

とはいえまずは自己紹介、彼女を召喚したマスターとして名乗っておくのが礼儀だろう。なのでアナスタシアと名乗った無表情な――心なしか得意気な顔をしている気もする――少女に自らの名を名乗り、これからよろしくと握手を求めようとしたところで、

「近づかないでください」

一気に興奮すら引いてしまうような、容赦の無い一言に襲われた。

◇

どうにか炎上汚染都市と変貌した冬木を踏破したは良いものの、オルガマリー所長は死んでしまい、カルデアの外の世界は燃え落ち、挙句の果てに世界を救えるのは藤丸立香ただ一人ときた。あらゆる物事が一時に押し寄せてきた中で、気絶したりせずにマイルームまで戻れたのは奇跡のようなものだった。

目下のところ問題は山積みだ。サーヴァントを召喚してカルデアの戦力も整えなければならないし、歴史上に発生した特異点を解決しに行く必要もある。のしかかる重荷

は途方もない総量と化していて、潰れないようにするだけでも一苦労だ。
それにもう一つ、立香としては捨て置けない問題があった。冬木にて召喚したキャスターのサーヴァント、アナスタシア・ニコラエヴナ・ロマノヴァのことである。
彼女は初めて立香が召喚したサーヴァントであり、しかも話を聞く限りでは本当に同年代の少女なのだ。仲間として以上にまず、出来る事なら友達として仲良くしたいと考えるのは人情だろう。
けれど残念なことに、アナスタシアはどう見ても人間不信としか思えない拒絶ぶりを見せている。今もカルデアに来るなり寡黙と無表情を貫き、サーヴァント用に空けられた部屋に引き篭もってしまった有様だ。話しかけようにもまず難易度が高すぎる。
どうしたものか――ベッドの上で転がりながら重いため息を吐いてしまう。まるで打開策が浮かばない。かといってこのままアナスタシアが誰とも打ち解けず、一人でカルデアの片隅に居るのを見過ごすのも出来そうになかった。
サーヴァントは歴史上の偉人達とはいうが、立香は過去の偉人についてほとんど知らない。アナスタシアについても精々が『ロシアっぽい人だなー』くらいの感想であり、うっかり地雷を踏んでしまう可能性も考えれば迂闊な行動には出れないのだ。
だがその程度でへこたれるほどやわではないし、コミュニケーション能力に自信があるという自負も伊達ではない。多少は粘ってしつこめに、だが相手が本当に嫌がる線引

きを見極めるのは昔から得意分野だ。ある程度手を尽くした上でどうしようもないなら仕方ないが、相手はまだ出会って一日足らず。諦めるには色々と早すぎる。

ひとまずは自分の周りをしっかりと落ち着けてから、彼女と向き合ってみて――

最初の目標は手始めに、拒否されてしまった握手を彼女と交わせるようにしようではないか。それからゆっくりと、話していけるようになればいいのだから。

# 絆レベル１――やや人間不信の皇女様

「申し訳ないですが、話す時は距離を取ってもらえると嬉しいです」

アナスタシアのつっけんどんな言葉に、立香は『ぐぬぬぬ……』と内心で漏らしながら引き下がった。さりげなく距離を詰めようとした途端にこれとは、やはり一筋縄ではいかぬ相手だ。

現在第一特異点オルレアンを攻略中のカルデアは、ひとまず鬱蒼とした十五世紀の森の中で休息を取っていた。聖杯を持つもう一人のジャンヌ・ダルクに対抗するためフランス中を駆けまわっている関係上、マスターの疲労も中々に溜まってしまう。パチパチと爆ぜる焚火を眺めながらの休憩は立香にとってもありがたかった。

この特異点で出会ったジャンヌを筆頭としたはぐれサーヴァントや、カルデアから共にやって来たマシュ達は現在周辺の見回りということで別行動を取っている。ではマスターは一人無防備に座っているのかと言えばそうではない。護衛として例の寡黙で冷たい皇女様ことアナスタシアが一緒だった。

しかし、それにしても会話が無い。夜の森で女二人、何も話さずに焚火を囲むなど気まずいにも程がある。そこで〝さりげないスキンシップ〟と銘打ってアナスタシアの

近くまで寄ろうとしたら先ほどの言葉が飛んできた訳だ。なので物理的に距離を縮めるのはいったん諦め、精神的な方から糸口を探ってみることにする。

こういう時にどうすれば良いか立香はよく知っていた。まずは当り障りのない会話から徐々に話題を広げていき、会話の主導権自体は自分が握るのだ。その際、自分の方がおどけ役となって相手を立てればよりスムーズに話は弾む。段々と相手も気安い口調になり始め、自分から話題を振ってくれればもうこっちのものである。

だが気を付けねばならないのは、相手がサーヴァントである点だろう。見た目は同年代だろうと辿って来た人生は一介の女子高生など比較にならないものがある。うっかり地雷に触れれば二度と仲良くなる機会など訪れない。

その観点でいえば最初に比べれて望みは見えてきている。冬木で召喚した時は「近づかないでください」と一蹴されてしまった訳だが、先の言葉は多少なりともこちらを気遣ってくれるものだった。微細であろうと立香を意識してくれている証拠だ。

これから先絶対に仲良くなれない、なんてことは絶対に無いはず。確信にも似た感情だった。

――だが敢えて言うのなら、別段アナスタシアと仲良くなることに特別なメリットがあるかと問われれば、おそらくは『無い』と断言できよう。

カルデアには頼れる後輩なマシュの他にも、立香の召喚に応じてくれたサーヴァント

――冬木で共に戦ったクー・フーリンや敵として対峙したアーサー王にエミヤなど――が居るから戦力には特段困らないわけで。彼ら彼女らは態度はどうあれ立香とコミュニケーションをしっかり取ってくれるし、戦力的にも申し分ない一流と呼んで差し支えない。

だから極論を言ってしまえば、アナスタシア一人とこうまで仲良くなろうとする必要は無いはずなのだ。本人が他者を避けているのだし、そこに立香が積極的に絡みにいく必要は何処にもない。〝適切な距離感を保って最低限の意思疎通さえできればそれで良い〟と考えるのが、きっと一番効率的だろう。

それでも何とかして仲良くなろうとしているのは、やはりそういう性分だからだろうか。『同年代の少女だから気安い関係になれれば楽しいだろう』という下心があるのは否定しない。けれどやはり、ほとんど誰とも話さずに居る存在を放っておくのは寝覚めが悪いにも程があったのだ。

「ロシアは寒かったか、ですか……？」

まずは軽いジャブから。本当に当り障りのない事すぎるが、変に穿って相手が答えられない方がもっとマズい。代わりにアナスタシアからは間抜けを見るような視線を向けられるが、これは笑って受け流す。ちょっとくらいアホをやっている方が相手も馴染み易いものだ。現にアナスタシアも無視することなく答えてくれた。

「不思議な事を訊いてくるのね、あなたは。寒かったかなんて、そんなの当然に決まっているでしょう。こうして夜に外出していること自体、しっかり防寒を整えなければ大変なことなのよ」

それは大変そうだ、と軽く頷いた。立香の頭の中ではロシア＝寒いという方程式が立っていたのだが、どうやら間違いではないらしい。日本育ちの立香には厳しそうな土地である。今も焚火に当たっていなければそれなりに寒く感じるが、アナスタシアは少しも堪えた様子はない。

でも代わりに夏も涼しくて過ごしやすそうだと言ってみれば、これには意外にも否定を返されてしまった。

「確かに冬は寒いですが、夏は案外マシになるものよ。涼しすぎず暑すぎず、ちょうど良い気温になるの。そういう時は積極的に外に出て遊んだりもしたわね」

これまた意外だった。普段の彼女の雰囲気や皇女という立場から、外で遊ぶなんて以てのほかだと勝手に考えていたのだ。随分と活発な少女であったらしい。

驚きの感情が顔に出すぎていたのか、アナスタシアもまた呆れともつかぬ苦笑の声を漏らした。

「ふふっ、意外だったかしら？　姉妹で追いかけっこや木登りをしたり、そういうのが好きだったのだけど……全部全部、遠い昔の思い出よ……」

懐かしそうに語るアナスタシアの瞳は、既に遠い所を眺めていた。彼女の来歴を簡単にだが学んだ立香だから、その最期と家族の思い出は切り離せないものだと知っている。これ以上はまだ土足で踏み込んで良い領域でもないだろう。

でもそれはそれとして、見た目よりも活発だというなら選べる話題もより増えてくる。思いもがけない印象を与える話題と言うのは取っ掛かりになりやすいのだ。

「なにかしら？……え、木登りには自信がある？　あなたが？　……ふぅん、そうなの。だからどうだという訳ではないけれど」

いや、それは嘘だ。立香が木登りについてカミングアウトした途端、アナスタシアの瞳が一瞬だけキラリと光ったのを見逃さなかった。だからニッと笑って『今度どっちが早く登れるか勝負してみよう』と提案してみれば、案の定氷のような態度が少し揺らいだようにも思えた。冷たい皇女の仮面が剥がれ、その下にある少女の地金が微かに顔を覗かせる。

「……まあどうしてもと言うのなら、受けて立ってあげても良いわ。でもそんなことより、あなたは人理を救うのでは？　その手足はお飾りでは無いのですから、木の節を掴み皮を蹴るよりも先に、まず世界を取り戻すべく努力しなさい」

この指摘にはぐうの音もでない立香であった。いやに具体的な例えが余計に木登りの熟練者を想像させるが、さすがにこれ以上とぼける訳にもいかない。本分を疎かにも

できないので、楽しみはまた今度だ。

さて、ここからどうするべきか。すっかり真面目な話題にシフトチェンジしてしまったが、もうちょっとのんびりとしたお話を続けたい。パチパチと爆ぜる焚火を眺めながら次の話題を必死に考えて――鼻がムズムズしてきた。あ、くしゃみが出る、そう意識した途端にクシュンと抜けるようなくしゃみをしてしまう。

風邪を引いたとか鼻炎とかではなく、単純に夜の寒さが原因なのだろう。気が付けば無意識の内に二の腕辺りを摩(さす)っている。焚火に当たっている前面は暖かいのだが、側面や背中はちょっと冷えているのだ。

どうやら中世フランスにおける夜の森を甘く考えていたようだ。これ以上の上着を立香は持っていない。仕方ないので身体を冷やさぬよう焚火への当たり方を変えようとしたところで、アナスタシアがおもむろに立ち上がっていた。

「今回だけ、特別ですよ……ヴィイ」

皇女の背後にふわりと黒い影が浮かび上がった。彼女の使役する使い魔、あるいは精霊ともされるヴィイだ。その精霊はアナスタシアが羽織っていた暖かそうな青い上着を受け取ると、音も無く立香に掛けてくれた。

同性の立香でも軽くドキッとするような良い香りが立ち込める――しかも極北の民の服だけあって非常に暖かい。防寒着としてはこれ以上ない出来である。

ただ、明らかに立香と距離を取っているアナスタシアが上着を貸してくれる理由が見当たらない。白いドレス姿になった彼女に礼を言いつつも戸惑いを隠せなかった。

「まぁ……この程度の寒さで震えられてもこちらが困りますので。ちょうど私(わたくし)も厚着が煩わしく感じていたところでしたから、押し付けるのに都合が良かっただけです」

――さすがはロシア生まれのロシア育ち、寒さに対する耐性が違うようで。

「世辞はいりません。朝になったらまたヴィイに取りに行かせるので、それまでは使ってもらって構いません。あまり汚さないようにだけ、気を付けてください」

ひとまず頷いておき、しっかりと借りた上着を身体に巻きつけ暖を取る。本当に暖かい。

まだツンツンした態度は変わらないが、こうして接しているとやはり地の性格は優しいのだと理解できる。だからもうちょっと色んなことを話して、より打ち解けられれば良いのだが。こればかりは時間が必要な工程だろう。

とにかく今晩のところはそれなりに会話も続き、自ら上着まで貸してくれたのだ。間違いなく関係は進んできている。だから今は焦らずゆっくりと信頼してもらえればそれで良い。

それにしても――なんだかあの手この手で女を落とそうとする悪い男にでもなったような気分だけど、気にしてもしょうがないか。

# 絆レベル２～３――壁越し会話な皇女様

「まぁ……壁越しに喋るくらいなら、構いませんが……」

つい十数分ほど前、自室に籠もるアナスタシアから突き付けられた無慈悲な言葉がそれだった。

オルレアンで焚火越しに会話したり上着まで貸してくれたじゃない!?　あれは王族系特有の気紛れだったの!?　――などと茶化したくなってしまった立香であるが、さすがにそんな冗談は通じないと弁えている。

オルレアンの特異点修復は無事に完了し、立香達は無事にカルデアへと帰還することが叶った。さらには特異点における縁も増えたおかげで新たなサーヴァント達も召喚に応じてくれ、人気（ひとけ）の少なかったはずのカルデアは徐々に賑やかになってきているのだ。

新たに加わったのはジャンヌ・ダルクにゲオルギウスといった聖人を筆頭とし、他にもフランスで関係を築いた者たちばかりだ。これだけでも頼もしいばかりであるし、誰もが人理修復に挑む立香を好意的に考えてくれているのはありがたい限りなのだが、それだけにアナスタシアに関する根は深い。

カルデアの清潔感溢れる廊下を歩きながら、立香ははぁと溜息を吐いてしまった。どうにもまだアナスタシアと仲良くなれていない。結局話すのは良くても近づくのは駄目、少なくとも部屋に入ってのんびりお話とはいかないようだ。現に今みたく入口で門前払いを喰らってしまった訳だし、敷居を跨ぐことすらできなかった。

こう言っては何だが、誰かと仲良くなるのは得意だという自負があった立香にとって、彼女は予想以上に難敵と言えた。それでも諦めないのはもはや意地の成せる業なのか。良心や打算だとか、面倒見が良いなどと言いかえることは勿論できる。だが結局のところ、こうまで頑なな相手に対して天邪鬼な心があるのは否定できないだろう。

さて、それにしてもどうするか。サーヴァント達は空き部屋をそれぞれ自由に使っているのだが、アナスタシアは自室から中々出てこない。だから壁越しとなると扉を挟んでの会話になる訳だが……流石にそれは色々と悲しい絵面だ。せめて電話か何かでもあればよかったのだが生憎とカルデアに通信機の予備は用意されていなかった。

このままでは一向に距離は縮まない。早く他の英霊達らしく馴染みすぎなくらいカルデアに馴染んで欲しいのは山々だが、チャンスすら出来ない現状はきつすぎた。

このまま時間をかけるだけでは一生関係の進展は無いだろう。ならどういった取っ掛かりを作るのか？　無難な話題はこの前やったから、出来ればもっと楽しい話題を提供して笑い合えれば最高なのだが。娯楽の少ないカルデアでは遊びを探すにも一苦労

だ。

思考はまとまらず、惰性に任せて足を進めてみれば、いつの間にかカルデア備え付けのレクリエーションルームにまでやって来ていた。レクリエーションと言ってもなんてことはない、たくさんの丸テーブルとそれを囲むように設置された椅子ばかりのカフェ染みた部屋である。他にも雑誌や自販機が置いてあったり、今は何も映らないテレビが鎮座していたりする休憩部屋だ。

かつてはカルデア職員たちの憩いの場だったのだろうが、現在ではもっぱらサーヴァント達の溜まり場にもなっている。土地や時代を越えた英霊たちが談笑したりやや気まずい空気になったりする一方で、スタッフたちもそんな彼らと混じって休憩しているのが常だ。

「あら、いらっしゃいマスター。随分と浮かない顔をしているのね」

取り敢えず空いている席に腰かけた立香に声を掛けてきたのは、すぐ近くのテーブルに居たマリー・アントワネットだ。白百合の姫とも称される彼女は今日も見る者を魅了する笑みを湛えている。だが立香の顔に何かを感じ取ったのか、「こっちへおいで」と言わんばかりの手招きを行っていた。

彼女の優雅な手招きに誘われ、すぐに立香は腰を上げるとマリーのテーブルへと移動した。先客はマリーともう一人、珍しくアマデウスやデオンの姿はそこに無い。普段な

らマリーと共に居るはずの彼らの代わりに座っていたのは、なんというか予想外な人物だ。

「これはこれはマスター、どうしたんですかぁ？　まるで投資に失敗して有り金溶かしたような顔してますけど～？」

間延びした特徴的な喋り方、人にはないケモ耳と尻尾を持った褐色の肌、美人なのにどこか残念な雰囲気を漂わせている彼女は、古くより伝承の中にだけ確認されているシバの女王その人に他ならなかった。

端的に言って、この女王はかなりお金に目が無い。今のイヤに具体的で心に刺さる例えからもうかがい知れるというものだ。そんな彼女が天真爛漫にして天然の入ったお姫様であるマリーと共に居るのは、どうにも理解しがたい事だった。

「あ、そう言われると傷つきますね～。私だってたまには真面目な話くらいしますとも。ええ、王妃の首飾りの価値は如何ほどとか、アマデウスさんに新曲作って貰って売ったら凄そうですねぇとか、その程度ですから」

結局平常運転じゃないか……つい呆れ顔になってしまう立香である。なんだろう、ホントこの残念さは。縁も無いのに力を貸してくれる姿は頼もしい限りだが、こういう所を見てるとガックシきてしまう。

それにしても、マリーとシバの女王は性格的に相容れるものなのか。仲が悪いという

無いだろうが、話が合うかどうか非常に気になるところでもある。
「あら、そんなことないのよ？　シバの女王のお話はとっても機知に富んでいるし、キラキラした宝石だって嫌いじゃないもの。それにこの耳！　とってもモフモフで気持ちいいのよ！」
「あ、あんまり触らないでくれるとありがたいのですがねぇ……敏感ですし。それでマスター、何かお悩みのようですね？　どうぞどうぞバーッとぶちまけちゃってください！　悩みを聞いて解決してお代をいただく！　これも立派な交易ですから」
　何だか軽い流れだが、マリーも頷いているし異存はなかった。簡潔に今の立香の悩みであるアナスタシアとのコミュニケーションの取り方について話してみる。あまり大勢で押しかけるような事をするつもりは無いが、他者の智慧を借りるくらいなら大丈夫だろう。
「わたしもあの皇女さんのことは気になっていたのよ。でも中々お話する機会に恵まれなくて……一緒にカルデアを巡ろうと誘っても全然応じてくれないの」
「あまりグイグイ来られて喜ぶ人じゃない、って感じでしょうかねぇ～。私もマリーさんも国の偉いとこに居た女というのは共通なのですが……」
　言いながらシバの女王はチラッとマリーの方を盗み見た。そうだ、よく考えてみればマリーもまたその最期は悲劇的に終わってしまったお姫様なのだ。真っ当に考えれば

アナスタシアのような人間不信になっていそうなものなのに、こうして明るく民を想うままなのが例外と言えよう。

当の本人もそのこと自体にはすぐに思い至ったらしく、滅多にない難しい表情をして考えこんでいた。似たような境遇の先達として何をしてやれるのか、正面から思案してくれているのだろう。

「そう、ね……恨むな、それでも人を信じろ、なんてわたしにも言えません。わたしは決してそのように考えることはありませんが、アナスタシアは彼女ですもの。無理に心を開かせようとするのはきっと辛いことなんじゃないかしら？」

「でしょうねぇ。けれど、だからといって放置しておくのもどうかと思いますが。敢えてシビアに言いますが、この閉鎖空間で誰とも会話しない方が居るのは当人のみならず、他の方々のストレスにも繋がってしまうものです。お金と人はナマモノなのです、いつまでも密閉されたままでは傷んで駄目になってしまうかと」

「一番実年齢の近いマスターが積極的に声を掛ける、というのは間違ってないと思うの。後はアプローチの方法ね。壁越しになら話して良いというのなら、ホントに壁越しに話をすれば良いのではなくて？」

出来ないことは無いだろうが、それもどうなのだろうか。廊下のドア越しに会話するのは雰囲気的に話も弾まないだろうし、かといって隣の部屋から声を掛けるには防音が

整いすぎている。向こうは透視の魔眼を所持しているから困らないのかもしれないが、立香にとっては大きな問題だ。

どうすればいいかな？　と訊いてみる。するとシバの女王はおもむろに紙コップを一つ取り出すと、その隣に普段から持ち歩いている香炉を置いた。何をするつもりなのだろうか？

「はいはーい、ここにあるのは何の変哲もない安いコップと、私の大事なジン達が入っている香炉です。この二つが揃った時、いったい何ができるでしょう？　ヒントはマスターの悩みを解消できるものです！」

――取り敢えず、シバの女王が謎掛けを放り投げるのはどうなのだろうか？

◇

コンコン、と扉を控えめにノックする。数秒待ってから、やはり氷のような声が立香の下へと届いてきた。

「何の用でしょうか、マスター。あまり私（わたくし）に構っている暇があるのなら、人理を救いに行ってはいかがです？」

アナスタシアの言葉は耳に痛い正論ではある。だが世の中正論だけが全てではない。こうして寄り道をすることが、後で大きく影響したりもするのだから。

手の中に握り締めた一つのチャチな紙コップを握りしめつつ、立香ははっきりと用件

を告げた。

「……え、本当に壁越しに話しに来た？　何を言っているのかしら、あなたは……」

戸惑いがちな皇女様の言葉に「まあ見てて」と返しながら、すぐ隣の空き部屋へと入った。そこからアナスタシアの部屋とを隔てる壁に紙コップを押し当て、メガホンの要領でまずは一言「どうもこんにちはー」。それからすぐに紙コップに耳を押し当てた。

「急に隣の部屋に移動したから何かと思えば……今の声は、そのコップによるものなの？　突然だから驚いてしまったわ」

すかさず紙コップに向かって「驚いてもらえて何よりです」と笑った。どうやらシバの女王が立案したこの原始的な作戦こと、紙コップ電話大作戦はしっかり成功しているようだ。

構造は本当に単純で、そこらの紙コップに彼女の使役するジンの一体を憑かせただけだ。後は彼？　が媒体となって立香とアナスタシアの声を届けてくれている。詳しい原理は企業秘密として教えて貰えなかったが。

ともかく、これさえあれば本当に壁越しの会話ができるのだ。単純に話せるだけでも嬉しいが、こうして紙コップを使って壁を挟んでお喋りなんて、まるで童心に帰って秘密基地で遊んでいるかのようなワクワク感もある。

「敢えて不便を楽しむのも一興ってことかしら……私（わたくし）もその感覚は分かります。でもま

さかこのような手に訴えてくるなんて……」

いざとなれば壁を見透かし読唇術で読み取ってしまう事も出来るのだろう。けれど、そこには熱が無い。無機質に言葉だけを読み取るよりも、直接言葉という感情を乗せたコミュニケーションの方が何倍も楽しいものなのだ。きっとそれは、彼女も分かってくれていると思う。

だからこそアナスタシアが胸に抱いた疑問は、立香が待ち望んでいた疑問でもあったのだ。

「あなたはどうしてそうまで私に構うの？　いったいどのようなメリットがあるかしら？　別にこうまでしてくれなくとも、人理を救う手助けを惜しむつもりはありませんが」

――これだ。面と向かってこれを言える時を待っていた。自分から言ってしまえば押しつけがましく、かといって言わなければ伝わらない本心。彼女が聞いてくれて初めて、立香が何を考えているのか伝えることが出来るのだ。

彼女への答えなど決まっている。ただ、仲良くなりたかっただけ。放っておけなかっただけなのだ。単純でそれ故に裏の無い、どこまでも真っすぐな言葉を紙コップに向かって言い放った。

「仲良くなりたい……私と、ですか……？　あなたと積極的に言葉を交わすこともせず、

他者を避け続けているこの私(わたくし)と?」

そうだ、その通りだとも。言ってしまえば単純な理屈だ。自分はアナスタシアと仲良くしたい。

彼女が案外と活発で、何より優しいというのはこの前のオルレアンだけでもよく分かった。それを放っておくなどできなかったし、元がお転婆ならそれこそ一緒に遊びたいと願うのだ。

果たしてこの心は氷の皇女に届いたのだろうか。しばし無言ばかりが紙コップから帰って来る。ドキドキしながら待っていると――不意に立香の手元から紙コップが消失した。

えっ、という短い叫び声が出てしまう。紙コップは何処だ、何処へ行ってしまったのか。突然のことにあたふたする立香だがどうしようもない。一つの予兆すらなく忽然と紙コップは消えてしまっていたのだ。

これは弱った――そう考えた次の瞬間、不意に部屋の扉が開いた。反射的に顔をそちらへと向ければ、そこにはさっきまで立香が持っていた紙コップを持った、アナスタシアが立っていた。しかも得意そうなしてやったりという表情まで浮かべている。

「驚いたかしら、マスター。私(わたくし)を驚かそうとした罰です、存分に慌てふためきなさい」

……つまり、アナスタシアの力で紙コップは立香の手元を離れたという事か。そうい

えば、彼女のスキルにはそういう〝ちょっとした悪戯〟を可能とするものがあったはず。スキル名は確か、シュヴィブジック（小さな悪魔）だ。

　これはしてやられた。笑いながら頭を抱える立香だが、ここでふと気が付いた。そういえばアナスタシアが部屋から出てきている。しかも壁越しに話していない。これはもしかして、少しは認めてもらえたということなのだろうか？

「それにしてもこれ、面白いですね……ただの紙で構成されたコップなのに、よく分からない生き物を入れるだけで糸電話みたくなるなんて。ねぇ、マスター」

　急に呼びかけられ、「あ、はい！」と勢いで返事をしてしまう。

「この道具も面白いのだけど、壁越しに話すのも面倒だわ。次からは同じ部屋に居ることくらいは許可しますので、努々忘れぬように」

　それだけ告げてアナスタシアは自室へと戻って行った。紙コップも一緒にである。

「あー、あの中のジンはどうなっちゃうんだろう」とか、シバの女王に対価として提案された〝ロマノフ王朝のイースターエッグを見せるよう説得する〟とか、そういうのどうすれば良いんだろうか。マリーにも相談に乗ってもらったからお礼をしたいところなのだが、取り敢えずだ。

　これでまた一歩仲良くなることに成功した。今はその結果を噛み締め喜ぼうではないか。